ヴィジュアルコンテンツにおける「少女」性に関する研究会

A Study Group on Girls' Culture in Visual Contents

朴 珍姫（京都大学大学院文学研究科 博士後期課程）

【メンバー】

一宮真佐子（京都大学大学院文学研究科グローバル COE 研究員）
日高　利泰（京都大学文学部）
森 下　　達（京都大学大学院文学研究科 修士課程）
トジラカーン・マシマ Mashima Tojirakarn（京都大学大学院文学研究科 修士課程）
金　　素 媛（立命館大学先端総合学 博士課程）

【ねらいと目的】

ヴィジュアルコンテンツにおける「少女向け」というカテゴライズは、雑誌メディアを中心とした伝統的マーケティング戦略のひとつとして捉えることができる。「近代」の産物としての少年／少女という区分が必ずしも自明視されない現在においてもそうした区分が存続していることから、これが戦略としては一定程度有効に機能していると考えられる。

「少女向け」ジャンルでは特に恋愛のような親密な関係が表現されることが多く、また逆にそうした商品を好むものとして「少女」が囲い込まれてきたということもいえる。こうした事態は不可視的な男性編集者によって担われてきたとされているが、近年制作サイドへの女性の参与も増大しているといわれる。

本研究会では、表現されたもののレベルでの親密性のありようの変化を追跡するにとどまらず、生産システムの変化とそれに伴うアプローチの変化やその効果といった点を聞き取り調査などから明らかにしたいと考えている。また、コンテンツ産業において情報は必ずしも一方通行的なものではなく、作り手と受け手の間でのコミュニケーションを通じて雑誌が作られるというような伝統をふまえ、近年のウェブを中心とした「語り」の空間も視野に入れ「少女向け」コンテンツをめぐる公共的なるものの可能性を探りたい。この過程の中で、「少女」の外部にある不可視的な存在としての男性受容者についての問題がこれまで以上に明確になるものと考えている。

当研究会においては月二回の例会を行い、参加者が個別に作品研究を進行・発表しつつ、全体として産業システムの調査および議論を行っていきたい。

【活動の記録】

定期研究会

2009.04.11	「少女マンガにおける男性同性愛の諸問題その 1」報告：日高利泰
2009.04.26	「アニメ表現の特性と戦闘アニメが表現するイデオロギー」 報告：トジラカーン・マシマ
2009.05.10	「少女漫画における男性同性愛をめぐる諸問題その 2」(ディスカッションのみ)
2009.05.23	「元編集者へのインタビュー中間報告」報告：日高利泰
2009.06.06	「高橋真琴から厳喜子へ―純情マンガにおける『3 段ぶち抜きスタイル画』と『瞳に星』」報告：金素媛
2009.06.20	「黄金期純情マンガの特徴について」報告：朴珍姫
2009.07.11	「現代マンガにおける農業・農村表象の変遷」報告：一宮真佐子
2009.08.01	花園大学にて夏目房之介の講演に参加
2009.08.22	「映画『ゴジラ』と戦争の記憶」報告：森下達
2009.09.05	「少女マンガ作家インタビュー（8/24）の中間報告」報告：一宮真佐子
2009.09.23	「非都市空間におけるコミュニケーション様態の諸表象について」 報告：日高利泰、橋爪太作（東大教養学部所属）
2009.10.10	「マンガにおけるページ数制約と主観表現」報告：トジラカーン・マシマ
2009.10.24	「マンガ表現の時空 (1) (2) (3) ―レイヤー分解・少女マンガのコマ・マンガ表現の感性認知記号論」を読む」（ディスカッションのみ）
2009.11.14	「編集者に対するインタビュー調査中間報告」、「ちばてつやインタビュー上映会」報告：日高利泰
2009.12.05	「『マンガの社会学』を読む」報告：森下達
2009.12.19	京都精華大学国際マンガ研究センター主催「国際学術会議 世界のコミックスとコミックスの世界」へ参加
2010.01.12	「韓国テレビドラマの純情漫画化過程」報告：朴珍姫
2010.01.23	「GCOE 成果報告会準備検討会」報告：日高利泰
2010.02.14	京都精華大学国際マンガ研究センター連続公開研究会「マンガと学術研究 第 6 回 女性が描く」への参加
2010.03.03	「BL の強度 ― ジャンル境界の画定とパロディの成立条件」報告：日高利泰
2010.03.26	「少女マンガ評論の現状考察および来年度の活動について」報告：日高利泰

インタビュー

2009.05.18	小学館の元編集者に対するインタビュー （日高利泰、朴珍姫、トジラカーン・マシマ）
2009.08.24	現役少女マンガ作家に対するインタビュー（日高利泰、一宮真佐子、 今田絵里香、朴珍姫、トジラカーン・マシマ、森下達）

【成果の概要】

研究会メンバーの個人研究としての発表（15 回）、インタビュー調査の概要報告・検討（3 回）、マンガ研究のシンポジウム・講演会などへの参加（3 回）、などの形で、2009 年度は累計 21 回の研究会例会を開催した。

制作現場の当事者のインタビューとして元編集者と現役作家それぞれ 1 名ずつから話を聞くことができた。この 2 つを比較することで約 40 年間の制作環境の変化を概観し、今後の研究の方針と課題を明確にすることができた。これを受け、少女マンガが恋愛などと結びつき、ジャンルとして自立していく初期段階としての 1960 年代における小学館の少女雑誌展開を中心的に検討した。ここで明らかになったこととしては、主として以下の点である。

- 60 年代にスタートする主要な少女（マンガ）雑誌の中で唯一創刊の経緯がはっきりしていなかった『少女コミック』の創刊母体が少女雑誌ではなく、また学年誌への系列化を念頭に置いた幼児向けの雑誌であったことがわかった。これは競合他誌とは大きく異なる状況である。
- いままで実態のよくわからない謎の雑誌とされてきた『少女サンデー』が、『少年サンデー』とは対照的にマンガを中心としないもので、『女学生の友』と深い関係があることがわかった。また『少女サンデー』の編集部は女性が多く、少女雑誌が主に男性編集者によって作られていたという従来の通説からは外れた特殊な雑誌であることがわかった。

また、現役作家の聞き取りから現在の編集体制や少女マンガ観について以下のことが分かった。

- 編集部の体制（人数や異動時期）や採用後の新人の扱いが出版社によりかなり異なることが分かった。また、この作家の場合、アンケートの順位や内容などはほとんどフィードバックされていない（新人期を除く）というが、逆の立場を取る編集者や作家もいるとしていた。編集者の作家へのスタンスの取り方は編集部として統一はされておらず、作品介入度の違いは性別やキャリアではなく個人差によるものと認識されている。
- 対象作家は「女性」を対象とし、自身を含む「女性」が面白いと思う作品を描いており、作品・雑誌の作り方のレベルで少女マンガ（誌）と少年・青年マンガ（誌）とは明確に異なるものとしており、「少女マンガらしさ」が自明視されていることが分かった。

研究会風景

「少女サンデー」表紙（上段左から：1960 年 9 月・創刊初秋号、60 年 12 月～61 年 4 月・月刊 No.1～5、61 年夏休み号、62 年 1～3 月）、小学館

タイで出版された日本の少女マンガ（上段および中段左から 3 冊までが版権取得の単行本、中段右端および下段右 2 冊が版権取得の雑誌、下段左 2 冊は海賊版の雑誌）